「人の命 一度に奪う」

広島市・八木ケ丘町内会長　奥迫さん

原爆、土砂災害 苦悩今も

75人が犠牲となった昨年8月20日の広島土砂災害。発生から約2カ月後に現地を取材した際、被災地の現状を説明してくれたのが八木ケ丘町内会（広島市阿佐南区八木地区）会長の奥迫信治さん(77)だ。広島原爆で弟を亡くし、自らも被爆者。この夏、同地区を再訪し思いを聞いたが、70年の歳月がめぐってもその口は重かった。

2日、災害から約1年がたった被災地を奥迫さんと歩いた。土砂にまみれ、崩れた家屋が無残な姿をさらしていた一帯には更地が広がっていた。だれかがこの場所で亡くなったのだろう。所々に花が手向けられ、人々の心に刻まれた傷の深さを思った。

奥迫さんの自宅は被害を免れたが、町内会は災害前の約110世帯から約70世帯に減った。「家をなくした人は次々と引っ越していった。戻ってきた人はいませんね」。その表情が一瞬曇った。この1年、地域再生に向け奔走した会長の心労は、どれほどのものだったのだろう。

現在も土砂災害の危険はあるが、「残っている人は、ここがついのすみかと言ってくれているんです」。そのためにも地域をどう守るか―。災害後、防災サイレンや雨量計が設置され、来年には砂防ダムが完成する。

災害現場で復旧の様子を話す奥迫信治さん＝2日、広島市安佐南区

災害から立ち上がろうとする被災地。原爆で廃虚と化した広島の復興の歩みと重なって見えた。

奥迫さんは外出中、爆心地から約1・5キロ地点で被爆。7歳だった。自らは助かったが、弟の勲さん(当時5歳)は大やけどを負った。黒い雨を全身に浴びながら、どうやって逃げたのかも覚えていない。弟は1週間後、息を引き取った。

「今でも原爆の写真を見ると体調が悪くなる。忘れようとしても頭と心のどこかで覚えとるんよ」。土砂災害のことは何でも話してくれるが、戦争や原爆の話になると時折、沈黙が続いた。70年たっても忘れられない苦しみ。被爆者の苦悩が垣間見えた。

仕事から離れた8年前から平和記念式典に参列する。「アメリカというより戦争そのものが憎い。今も核兵器を持っている国があるなんて恐ろしい」。今年も妻の郁江さん(71)と会場を訪れ、核廃絶と平和を願って手を合わせる。

昨年までは慰霊の夏もここまでだった。ことしは2週間後、町内で災害犠牲者の慰霊式を計画している。

「原爆も土砂災害も何の罪のない人たちの命を一度に奪ってしまう。こんな残酷なことはない」。二度の惨禍を知る奥迫さんの言葉が身に染みた。

（西島宏美）

2015 ヒロシマ ナガサキ